

学会ニュース

日本ヘルスプロモーション理学療法学会 第16回学術集会のご案内

1. 開催要項

テーマ：スポーツが拓くヘルスプロモーション

日 時：2026年11月1日（日） 9：00～受付（9：30開会）

会 場：畿央大学 K棟 KB04講義室

（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

大会長：福本 貴彦（畿央大学 健康科学部 理学療法学科 教授）

参加費：3,000円（大学院生は1,000円、学生は無料）

参加申込：2026年10月15日締切

*事務局より送付されたURLから、必ず事前に参加申込を行ってください。

大会事務局：畿央大学 健康科学部 理学療法学科 松本大輔

TEL：0745-54-1601 E-mail：d.matsumoto*kio.ac.jp（*は@へ）

会場案内

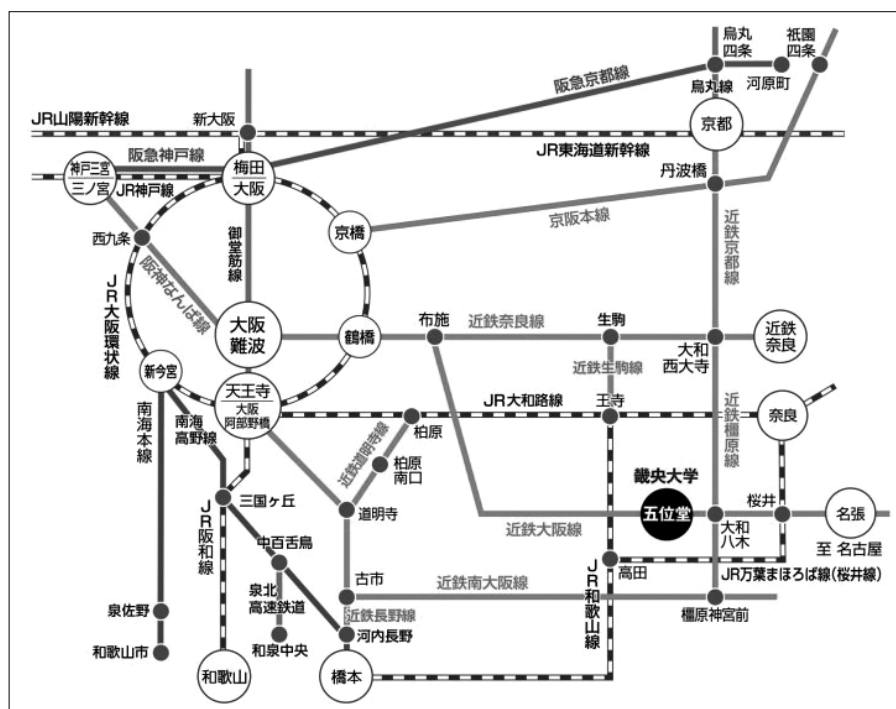
奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2 畿央大学 KB04講義室

*駐車場の準備がございませんので、公共交通機関でお越しください。

*近隣の施設への駐車はご遠慮ください。

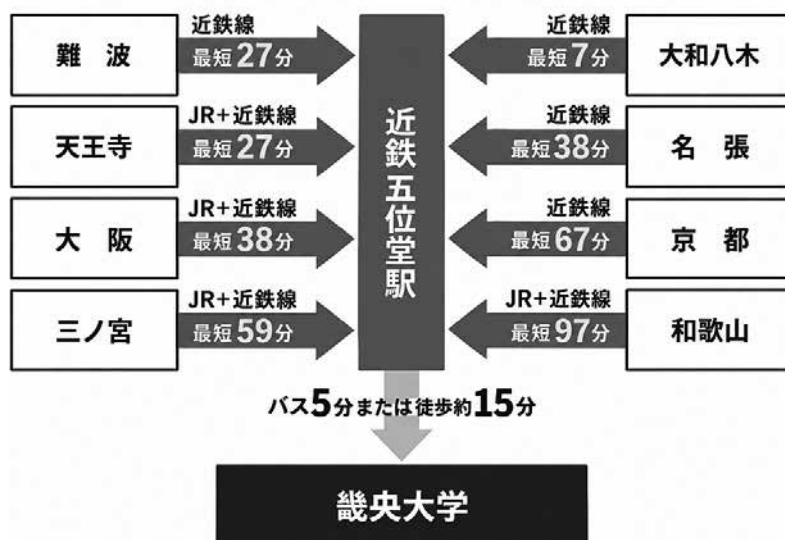
*昼食はRB ラウンジ（食堂なごみ地下スペース）をご利用ください。

アクセスマップ

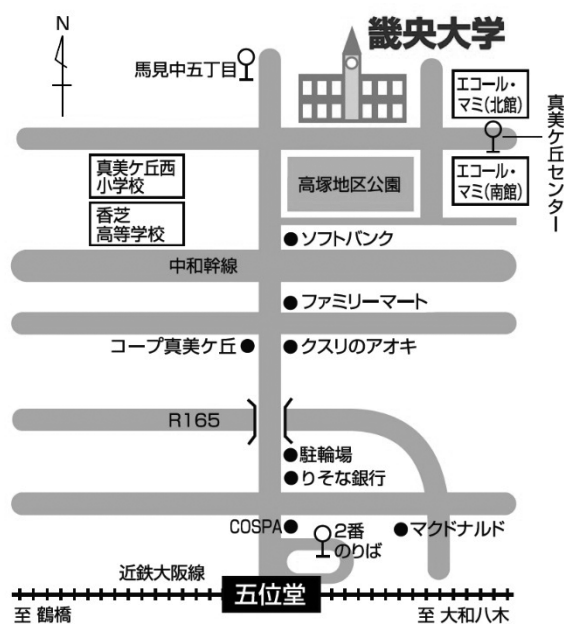


アクセス方法

公共交通機関をご利用の方

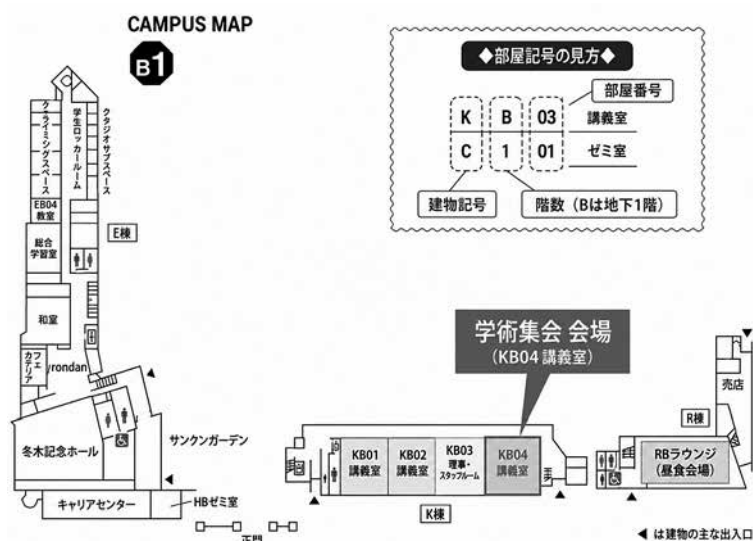


近鉄五位堂駅から大学までの経路



会場案内

正門からすぐ右の建物（K棟）にお入りください。



2. 大会プログラム

開会挨拶 9:30～9:35

福本貴彦（日本ヘルスプロモーション理学療法学会 第16回学術集会大会長）

教育講演 9:35～11:05

「運動器ヘルスプロモーションにおける DX・AI の活用」

演者：青山朋樹（京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻 教授）

実演：安藤祐介（事業サポート てきぱき 代表）

座長：福本貴彦（畿央大学 健康科学部 理学療法学科 教授）

一般演題 第1セッション 11:10～12:00（発表7分・質疑応答5分）

座長：徳田光紀（平成記念病院 リハビリテーション課 主任）

1. 高校男子バスケットボール選手における体重比大腿前面筋厚の評価意義

ーポジション特性と膝関連傷害既往に着目してー

山下 裕（和歌山リハビリテーション専門職大学），

濱地 望，原田伸哉，小西裕之，松本典久（令和健康科学大学），下田武良（国際医療福祉大学），古後晴基（令和健康科学大学）

2. 高校生のメンタルヘルスにおけるスポーツの効果について

村田 潤（長崎大学），萩田憲星，久田結月（長崎県立波佐見高校）

3. 幼児における足趾握力と運動能力の関連

石橋結良（畿央大学理学療法学科），加納希和子（大阪行岡医療大学），福本貴彦（畿央大学）

4. 障がいの有無と世代を超えた車いすダンス舞台作品の共創

—参加者・観客アンケートによる実践報告—

室井明日香（車いすダンスユニット Flavary）

総会 12:05～13:00 KB04講義室 / **昼食** RB ラウンジ（食堂なごみ地下スペース）

大会長講演 13:10～14:10

「スポーツが拓くヘルスプロモーション」

演者：福本貴彦（畿央大学 健康科学部 理学療法学科 教授）

実践紹介：加納希和子（大阪行岡医療大学 医療学部 理学療法学科 講師）

座長：福本貴彦（畿央大学 健康科学部 理学療法学科 教授）

一般演題 第2セッション 14:15～15:15（発表7分・質疑応答5分）

座長：粕渕賢志（大阪人間科学大学 保健医療学部 理学療法学科 准教授）

5. 屋外暑熱環境が若年健常者の10m 歩行速度および温熱知覚に及ぼす影響

芦田大介（朝日医療大学校），西尾久英，大庭潤平，柿花宏信（神戸学院大学），

井奈波良一（岐阜大学大学院），岩井信彦（神戸学院大学）

6. 歩数に着目した新たな体力テスト“6m 歩数テスト”の再現性および妥当性の検討

菊地雄貴（森ノ宮医療大学），

鍵 菜月，野上佳吾，福田悠翔，堀江 淳，白岩加代子，山崎岳志，村田 伸（京都橘大学）

7. 若年成人におけるロコモティブシンドロームと過去の運動習慣の関連

大杉紘徳，栗原 靖，安齋紗保理，深谷泰山，丸山あかね，二宮彩子（城西国際大学）

8. 地域在住の男性高齢者における骨量低下とヘルスリテラシーの関連

葛迫 剛（京都橘大学），菊地雄貴（森ノ宮医療大学），中野英樹（京都橘大学），

合田明生（北陸大学），森 耕平（関西福祉科学大学），白岩加代子，堀江 淳，

村田 伸（京都橘大学）

9. 地域在住高齢者におけるフレイル状態の変動と新規要介護認定発生に関連：4年間の追跡調査

安齋紗保理，大杉紘徳（城西国際大学），柴 喜崇（福島県立医科大学）

優秀演題表彰式・閉会式 15:20～15:30

優秀演題表彰式

第17回大会 次期大会長挨拶

教育講演

「運動器ヘルスプロモーションにおける DX・AI の活用」

【講演者】 青山朋樹 先生（京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻 教授）

【要 旨】

運動器リハビリテーションの目的は、異常運動を抑制し生理的機能を再獲得することである。従来、アセスメントは問診、視診、触診、動作分析、画像評価などの多角的な所見に基づき行われてきた。現在は各項目の DX 技術による単独精度は発展途上であるが、AI は複数の非定型データを統合・判別することに長けており、今後は新しいアセスメント支援モデルが登場する可能性がある。VR 技術やウェアラブル TENS 等の介入は、運動療法のコンプライアンスを向上し、持続的なリコンディショニングを可能にする。DX・AI 技術の浸透は、病院で行われるリハビリテーションを完全に代替するものではない。しかしながら治療前、あるいは治療後の継続的なヘルスプロモーションにおいてはその効果を発揮し、臨床リハビリテーションと接続することで、切れ目のない新たな「ヘルスプロモーションバリューチェーン」の創出が可能となる。

【実 演】 安藤祐介 先生（事業サポート てきぱき 代表）

一般演題 第 1 セッション

高校男子バスケットボール選手における体重比大腿前面筋厚の評価意義

—ポジション特性と膝関連傷害既往に着目して—

山下 裕（和歌山リハビリテーション専門職大学），

濱地 望，原田伸哉，小西裕之，松本典久（令和健康科学大学），下田武良（国際医療福祉大学），

古後晴基（令和健康科学大学）

高校バスケットボールではポジションにより要求される身体機能が異なる。本研究は、高校男子選手における体組成、体重比大腿前面筋厚、敏捷性および膝関連傷害既往の関係を、ポジション特性を踏まえて検討した。男子選手92名を対象に、身長、体重、骨格筋指数（SMI）、大腿直筋・中間広筋厚、反復横とび、垂直跳び、練習量、傷害既往を調査した。左右平均筋厚和を体重で除した値を体重比大腿前面筋厚とし、ガード、フォワード、センター別および膝関連傷害既往の有無で比較した。体重比筋厚はガード群0.67、フォワード群0.57、センター群0.52で、ガード群は非ガード群より高く（ $p<0.001$ ）、反復横とびも高かった（64.5対60.4回、 $p=0.004$ ）。膝関連傷害既往あり群はSMIが高い一方（8.52対8.20）、体重比筋厚は低く（0.58対0.64、 $p=0.013$ ）、垂直跳びも低い傾向を示した。ポジション特性と膝関連傷害既往を踏まえた身体機能評価では、全身筋量だけでなく、体重に対する大腿前面筋厚と敏捷性を組み合わせて把握する必要性が示唆された。

高校生のメンタルヘルスにおけるスポーツの効果について

村田 潤（長崎大学）、萩田憲星、久田結月（長崎県立波佐見高校）

高校生のメンタルヘルスに対する日頃のスポーツ競技への関わりがどのような効果を示すのかを確かめるために、長崎県のA高校1年生から3年生までの生徒197名を対象として精神健康度（K10）および自己効力感に関するアンケート調査を実施した。さらに、調査結果を運動部所属群（97名）と非運動部所属群（100名）に分類し、2群間のデータの違いをマンホイットニーU検定によって比較したところ、K10のスコアは運動部所属群で低い傾向があった（ $p=0.09$ ）。一方で、自己効力感は運動部所属群で高い値を示した（ $p<0.05$ ）。また、運動部の種目別で比較すると、練習量の多い運動部のスコアが好成績を示していた。これらの結果は、運動部に所属してスポーツに関わることが高校生の心理機能に対してネガティブな思考を抑制し、ポジティブな思考を強化する可能性を示唆する。

幼児における足趾握力と運動能力の関連

石橋結良（畿央大学理学療法学科）、加納希和子（大阪行岡医療大学）、福本貴彦（畿央大学）

目的：幼児における足部形状・足部機能と運動能力との関連を検討した。

方法：幼稚園児160名（4～6歳）を対象に、FootlookによるHライン判定、足趾握力、25m走、立ち幅跳び、両足連続跳び越し、ボール投げ、体支持持続時間、捕球を測定した。扁平足群と非扁平足群を比較し、足趾握力と運動能力の関連を相関分析および年齢・性別・体重を調整した重回帰分析で検討した。

結果：扁平足群は6名であり、群間差は認めなかった。足趾握力は、調整後も立ち幅跳び、両足連続跳び越し、ボール投げ、体支持持続時間、捕球と有意に関連した。

結論：幼児の運動能力には足部形状より足趾握力が関連する可能性が示された。

障がいの有無と世代を超えた車いすダンス舞台作品の共創

—参加者・観客アンケートによる実践報告—

室井明日香（車いすダンスユニット Flavyary）

【はじめに】 共生社会の実現に向け障がいのある人の文化活動への参加が推進されている。車いすユーザーと健常者による車いすダンス舞台作品の共創が参加者と観客にどう受け止められたかを探索的に検討した。

【活動内容】 2025年9月、10～70代の18名（車いすユーザー8名、大半はダンス未経験）が約3か月・月2回の練習を経て群舞作品を創作・上演した。支援する／される役割を固定せず、身体特性を活かし合う構成とした。公演後の無記名アンケート（複数選択式と自由記述）に出演者12名・スタッフ（保護者）1名・観客34名が回答した。

【結果】 出演者・スタッフ13名全員が「チームで創る達成感」を選択し、12名が継続を望んだ。自由記述では8名が「違いがあるからこそ生まれる調和」など障がいの有無を隔てない関係に触れた。観客では「共に創る美しさ」を25名、「考え方が変わった」を9名が選択した。

【まとめ】 本活動の回答者には達成感や対等な関係性、認識の変化がみられた。ただし、観客回答者に出演者の関係者が多く、事前評価・比較対象がないことから、変化の断定はできない。今後は参加前後の評価を加え、共創の意義をさらに検討したい。

大会長講演

「スポーツが拓くヘルスプロモーション」

【講演者】 福本貴彦 先生（畿央大学 健康科学部 理学療法学科 教授）

【要 旨】

スポーツは、身体機能の維持・向上に加え、楽しさや達成感、人とのつながりを通じて、主体的な健康づくりを後押しする可能性を持つ。本講演では、「スポーツが拓くヘルスプロモーション」をテーマに、ライフステージに応じたスポーツへの参加と理学療法士の役割を考える。小児期では、新体力テストを通じた体力・運動能力の把握と、運動への関心や意欲を育む支援について述べる。青年期では、障がいの有無にかかわらず心身の状態に応じてルールや用具、環境を調整するアダプテッドスポーツに触れ、多様な身体特性を持つ人々の挑戦や交流、社会参加を支える視点を提示する。高齢期では、高齢者向けのアダプテッドスポーツを取り上げ、安全に楽しみながら継続できる活動のあり方を検討する。さらに、加納希和子氏による実践紹介を交え、参加を促す工夫や継続に向けた支援、現場の課題を共有する。これらを通じて、身体的・心理的・社会的な側面からスポーツの意義を捉え、年齢や障がいの有無にかかわらず、誰もが生涯にわたりスポーツに親しめる地域づくりと、ヘルスプロモーションにおける理学療法の可能性を展望する。

【実践紹介】 加納希和子 先生（大阪行岡医療大学 医療学部 理学療法学科 講師）

屋外暑熱環境が若年健常者の10m 歩行速度および温熱知覚に及ぼす影響

芦田大介（朝日医療大学校），

西尾久英，大庭潤平，柿花宏信（神戸学院大学），

井奈波良一（岐阜大学大学院），岩井信彦（神戸学院大学）

屋外暑熱環境が若年健常者の10m 歩行と温熱知覚に及ぼす影響を検討した。対象は8名（ 20.6 ± 1.4 歳，男性6名）とした。屋内（WBGT 19.4°C ）と屋外（WBGT 28.8°C ）で通常・最大10m 歩行を各2回実施し，主要評価項目を通常歩行速度とし，歩行時間，歩数，ケイデンス，鼓膜温，TSV および温熱的不快感を副次評価項目として比較した。実施順は入れ替えた。連続変数には対応のある t 検定，主観尺度には Wilcoxon 符号付順位検定を用いた。通常歩行速度は屋内 $1.32 \pm 0.23\text{m/s}$ ，屋外 $1.50 \pm 0.23\text{m/s}$ で，屋外で有意に上昇した（ $p=0.014$ ）。通常歩行時間と歩数も有意に減少した（ $p=0.025$ ， $p=0.015$ ）が，ケイデンスに有意差はなかった。屋外では TSV および熱的不快感が有意に上昇し（ともに $p=0.008$ ），最大歩行後までの鼓膜温変化量も有意に増大した（ $p=0.024$ ）。以上より，屋外暑熱環境では温熱負担が増大する一方，若年健常者の通常歩行速度は歩数減少を伴って上昇する可能性が示唆された。本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施し，対象者から書面による同意を得た。

歩数に着目した新たな体力テスト“6 m 歩数テスト”の再現性および妥当性の検討

菊地雄貴（森ノ宮医療大学），

鍵 菜月，野上佳吾，福田悠翔，堀江 淳，白岩加代子，山崎岳志，村田 伸（京都橘大学）

本研究では，歩数に着目した新たな体力テストである“6 m 歩数テスト”の再現性および妥当性を検証した。対象は，2025年に開催された健康調査に参加した220名（男性：59名、女性：161名）の地域在住高齢者とした。6 m 歩数テストの再現性を検証するため，同一検者が同一被検者に対して6 m 歩数テストの測定を2回実施し，信頼性分析により男女別に級内相関係数（ICC）を算出した。また，妥当性を検証するため，6 m 歩数テストの測定値について，女性で6歩、男性で5歩を探索的にカットオフ値として設定した。カットオフ値に基づいて2群に分類し，男女別に身体機能を比較した。信頼性分析の結果，ICC(1,1) は，女性で0.911、男性で0.869であり，いずれも高い検者内信頼性を示した。2群比較の結果，カットオフ値を上回った群では，男女ともにすべての身体機能が有意に不良であった。さらに，年齢と身長で調整した共分散分析でも，これらの有意差は維持され，構成概念妥当性が示された。本研究により，6 m 歩数テストは高い再現性を有し，地域在住高齢者の身体機能を把握するための簡便な体力テストとして有用である可能性が示唆された。

若年成人におけるロコモティブシンドロームと過去の運動習慣の関連

大杉紘徳, 栗原 靖, 安齋紗保理, 深谷泰山, 丸山あかね, 二宮彩子 (城西国際大学)

身体機能は20～30歳頃にピークを迎えるが、大学生でもロコモティブシンドローム (LS) の存在が報告されている。本研究は、若年成人の LS 有病率を調査するとともに、LS と最も関連する過去の運動習慣の時期を明らかにすることを目的とした。対象は大学生198名 (男性99名、平均年齢 20.5 ± 1.3 歳) とし、立ち上がりテスト、2 ステップテスト、ロコモ25により LS を判定した。さらに体組成、握力、閉眼片足立ち時間、5 m 歩行速度を測定し、小・中・高校時代の運動習慣を後ろ向き調査した。結果、24名 (12.1%) が LS に該当した。LS 群と非 LS 群の間で体組成や身体機能に有意差は認められなかった。一方、高校時代の定期的な運動習慣は LS 非該当と有意に関連したが、小学校および中学校時代の運動習慣との関連は認められなかった。ロジスティック回帰分析でも、高校時代の運動経験のみが LS と独立して関連する要因として抽出された。以上より、大学生においても LS は存在し、その予防には青年期後期における継続的な運動習慣が重要であることが示唆された。現在の身体機能よりも高校期の運動歴が LS に強く関与する可能性が示された。

地域在住の男性高齢者における骨量低下とヘルスリテラシーの関連

葛迫 剛 (京都橘大学), 菊地雄貴 (森ノ宮医療大学), 中野英樹 (京都橘大学), 合田明生 (北陸大学), 森 耕平 (関西福祉科学大学), 白岩加代子, 堀江 淳, 村田 伸 (京都橘大学)

本研究は、地域在住男性高齢者を対象に、身体・心理的要因、運動習慣およびヘルスリテラシー (Communicative and Critical Health Literacy : CCHL) を含めて、骨量低下の関連要因を明らかにすることを目的とした。対象は、地域在住男性高齢者178名とし、骨量低下の有無により骨量低下群 (62 名)、骨量維持群 (116名) に分類した。調査項目は、低栄養、握力、通常歩行速度、うつ傾向、運動習慣、CCHL とした。2 群比較の結果、骨量低下群は骨量維持群と比較して握力、通常歩行速度、CCHL が有意に低値を示した。一方、骨量低下の有無を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析の結果、CCHL のみが関連要因として抽出された (オッズ比0.677, 95%信頼区間0.482-0.951)。これらの結果から、地域在住男性高齢者における骨量低下には、身体的要因のみならず、健康情報を収集・理解し、適切に活用する能力であるヘルスリテラシーが関与している可能性が示された。今後は、ヘルスリテラシーが骨量低下に及ぼす影響について縦断的に検討する必要がある。

地域在住高齢者におけるフレイル状態の変動と新規要介護認定発生に関連：4年間の追跡調査

安齋紗保理, 大杉紘徳 (城西国際大学), 柴 喜崇 (福島県立医科大学)

フレイルは高齢期の健康を阻害する要因である。一方、フレイルは可逆的であり、改善と再発を繰り返す可能性がある。本研究では、地域在住高齢者を対象に、フレイルの移行パターンと新規要介護認定発生との関連を検討した。対象は、ベースライン調査でフレイルに該当し、その後2年間の追跡調査を完了した1,702名とした。3時点のフレイル該当状況に基づき、4群に分類した(持続フレイル群(フレイル-フレイル-フレイル)、一過的改善群(フレイル-ロバスト-フレイル)、改善後持続群(フレイル-ロバスト-ロバスト)、遅延改善群(フレイル-フレイル-ロバスト))。ベースラインから4年後の新規要介護認定を目的変数とし、ロジスティック回帰分析を用いて、持続フレイル群を基準にオッズ比(OR)を算出した。その結果、改善後持続群で要介護認定発生リスクが有意に低かった(OR: 0.42, 95% CI: 0.20-0.86)。一方、一過性改善群、遅延改善群では、有意なリスク低減は認められなかった。これらの結果から、フレイルから一時的に改善するだけでは十分ではなく、早期にフレイルを改善しその後ロバストを維持することが、将来の要介護状態を予防するうえで重要であることが示唆された。